

けいはんな学研都市新たな都市創造委員会 第1回総会 議事概要

日時：平成27年7月29日（15：10～17：15）

場所：ウエスティン都ホテル京都 2階山城の間

《議事概要》

1. 開会

2. 挨拶、趣旨説明

- ・ 主催者を代表して国交省より挨拶及び開催主旨の説明が行われた。

3. 委員長及び副委員長選出

(1) 委員長及び副委員長選出

- ・ 委員の互選により学識経験者の山極委員が委員長に選出された。また、委員長により副委員長として柏原委員が指名された。

(2) 委員長挨拶

- ・ 委員長から開会に当たっての挨拶が述べられた。

4. 議事

(1) 設置要綱、委員会の進め方及び議事の公開

- ・ 幹事より設置要綱、委員会の進め方及び議事の公開について提案があり、了承された。

(2) 過去30年間の成果と新たな都市創造に向けた取組

- ・ 幹事より、けいはんな学研都市の過去30年間の成果と新たな都市創造に向けた課題等に関する資料説明が行われた後、委員より今後の取組み方向等について意見が述べられた。
- ・ 幹事より今後の進め方について説明がなされた。

5. 閉会

《主な発言内容（順不同）》

①けいはんな学研都市全体、ビジョンに関すること

- ・ 世界の動きが非常に加速化する中、イノベーションの創出は非常に重要な課題。学研都市は、歴史の上に立って新たなミッションを造らなくてはならない時代に入った。
- ・ これまでの「自然の克服」から、「ヒューマンサイエンス」が次の時代のトピックであり、学研都市から「人中心の科学」が育っていくことが重要である。
- ・ 国の諸計画でも学研都市を是非位置付けて頂き、国と地元が一体となって学研都市の振興に取り組んでいければ良い。

- ・学研都市を関西の中で位置づけ、振興していくことが重要である。
- ・社会の要請に応えながら、関係者が一体となって取り組めるビジョンの策定が期待される。
- ・ステークホルダーにとって、ビジョンを実現するとどういった良いことが起こるか、の視点でビジョンを考えることが必要である。
- ・世界が注目するような健康長寿社会モデル文化都市を目指し、総合力を発揮しヘルスケア、医療分野の先端都市の実現を一つのミッションにしてはどうか。

②学研都市における研究の展開に関すること

- ・これからの社会課題である健康長寿の延伸の領域を重要な研究活動のターゲットと考えている。
- ・身近な課題、特に高齢社会への対処を考えることが、そのまま先端的な技術を生み出す可能性がある。科学技術を医療、介護、生活支援の分野に活用することが必要。
- ・農と食と健康を結ぶネットワークの形成が必要。食の健康機能性については、関西は世界の研究拠点の一つであり、けいはんなには多くの関連企業も立地している。研究機関や企業、自治体等が協力すれば、学研都市の総合力の強化も可能であるし、農と食と健康を結びネットワークができ、世界的な課題に具体的な成果を出すことが出来れば、学研都市の理念の実現、新産業の創出にも寄与すると思う。・京大附属農場は、基本的には教育の場であるが、日本を代表する次世代型農業技術の開発と実証の場、農業や食糧生産、植物の資源利用の高度化等の先端研究の発展に資するような拠点を目指している。また産官学連携のプラットフォームとして自治体や学研都市を更に発展させる牽引役の役割も担っていきたい。

③イノベーション、新産業の創出等に関すること

(連携)

- ・社会実装や事業化に向け、「うめきた」などの他の拠点との実効性ある連携など、学研都市を中核とした関西全体でイノベーションを進めていく環境づくりに努めたい。
- ・学研都市での研究等成果を未来社会に活かしていくことや、ICT技術に磨きをかけ成果展開も含め産学官の連携強化に期待する。
- ・多様な分野の相互連携と産業創出に向け、KICKの活用を進めるべきである。
- ・集積している開発・研究機能を結び付け産業、起業に繋ることが重要である。
- ・進出企業のニーズを汲み上げ、生産機能を有する企業と研究機関とのコラボレーションを促進する必要がある。・今後、自社だけでは多様な技術開発や研究の推進は難しく、オープンイノベーション、産官学連携を強化したい。海外ではオープンイノベーションの仕組みが極めてシステムティックで簡単に利用できる。連携テーマに即した担当の研究者の紹介や手続きの迅速な処理など、ソフトの整備も必要である。

- ・他の産業拠点や地場産業との連携が重要。地域の産業おこしに、学研都市の研究等の成果が提供され、連携が強化されることが重要である。

(仕組み、推進方策等)

- ・革新的な研究開発を新産業につなげるには、異なる研究分野等の知の融合が求められており、研究マネジメントをできる仕組みをどう作るかが課題である。
- ・世界をリードするオンリーワンの研究を進化、融合させる戦略を、牽引者として見せるような戦略的な研究マネジメントが重要である。・リサーチパークとして弱いのは、ここから世界的企業が生まれていないことがある。不足しているものの一つは、大きなファンドの仕掛けである。・阪大では、産学連携でイノベーションを起す仕組みとして、出資事業をスタートする。昨年、阪大の100%出資子会社の大阪大学ベンチャーキャピタル(株)を設立した。今後ファンドへ本学からの出資を行うとともに民間からも出資を募り、新しいベンチャーの設立等を図っていく。
- ・ラボ棟の研究者の独り立ち等に向けたベンチャー育成の推進が必要である。
- ・民中心となっているヘルスケア等の研究をさらに牽引する政府系研究機関を誘致すべき。シナジーを生み出す力となる。創出すべき新産業としてサービス産業も重要。ヘルスケア等が役立つのではないか。
- ・住民がいること、産学官+住民の共同研究、実装事業ができることへの外からの高い評価を活かすべき。

④都市形成に関すること

(都市のあり方)

- ・我が国では、長期的にみれば人口が減少するなか都市のコンパクト化を目指しており、学研都市は一つのモデル又は先端的な都市のエリアとしての生き方を示すことにとり得る。学研都市が、コンパクト化を目指す地域の一つの先端的な姿を、学研の役割の明確化、独自性、関係者の認識共有化を通じて実現することが一つのテーマと考える。
- ・人口が増えていることも重要。新しい人を迎え入れ続けることが大切である。
- ・昼間人口がどうしたら増えるかについても、キーワードとして考える必要がある。
- ・地方創生に向け、基礎自治体として、県やけいはんなの関係機関と連携を進めたい。

(都市基盤)

- ・インフラ整備は着実に進展しているが、クラスター間のアクセス、循環性の確保が必要である。
- ・国道163号は、地元だけではなく、関空との接続も含めて関西全体の一体化にも大きく寄与する道路として、速やかに整備を図るべき。
- ・整備が遅れている高山第二工区は放置するとリスクが大きい。しっかり考えていく

い。

(居住・文化・芸術・歴史と科学)

- ・まちの成熟化や文化創生へは、学研都市がとってきた迂遠な方法が、実は近道であったかもしれない。
- ・居住も大きな独自性。文化・芸術と科学の融合は重要な視点である。
- ・京都・大阪・奈良を結びつけるのは古代の歴史。日本国家の発祥の地に学研都市が築かれている。アート、文化に歴史を加えてはどうか、平城宮跡を活用してもらいたい。
- ・文化創造発信を経済活動に反映させてブランド化につなげることを目指す必要がある。豊かな文化と先端的な知の資源のシナジー効果を発揮するための戦略が必要である。

⑤都市運営に関すること

- ・学研都市のポテンシャルは高いが、知名度に少なからず課題がある。まちとしてのブランドの確立、研究機関の共同・連携・連動、さらに情報発信が必要である。
- ・PRの展開が重要。統一感のある動きがあれば、国際的な観点からもインパクトが生まれる。
- ・ATR や奈良先端大は海外で極めて高い評価を受けている。学研都市の知名度が低いのは、単に学研都市のイメージ戦略がうまくいってないだけではないかと思う。
- ・学研都市として注目を集める様な継続的なイベントも必要である。